

# フィールドワークによるアクティブ・ラーニングと学生の学びの認識

三ツ木 真実・佐野 愛子・澤田 隆

**抄録:**北海道文教大学外国語学部国際言語学科では、2016年度の新カリキュラム実施に伴い、アクティブ・ラーニング主体の講義形態を導入した。本稿では、導入例として同年度後期に授業の一環として実施したフィールドワークを取り上げ、「他者とのコミュニケーション」「調査課題に関する議論」「授業で行なっているプログラム」「教師の支援」「学生の成長」の観点から実践に対する学生の認識を把握し、今後の授業デザインに向けたフィードバックを得た。さらに、事前学習及びフィールドワークを通じて、実際の学びの主体者である学生自身がどのような学びを得られたと認識しているかを考察した。

**キーワード:** アクティブ・ラーニング、フィールドワーク、学びの認識

## 1. はじめに

### 1.1 アクティブ・ラーニングとしてのフィールドワーク

平成 24 年の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（中央教育審議会，2012）では、主体的な学びを実現する手段としてアクティブ・ラーニング（能動的学修：Active Learning 以下 AL）が打ち出され、大学教育の新たな展開としてその必要性が叫ばれている。AL の定義は、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」（中央教育審議会用語集，2012）とされている。その方法論は多様であり、例えば、教室内のグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク、教室外の体験型学習やフィールドワーク等が該当する。これらの多様な教育方法のうち、北海道文教大学外国語学部国際言語学科では、新カリキュラムにおける AL の実践として、フィールドワーク (Fieldwork 以下 FW) を取り入れた授業を 2016 年度に実施した。

### 1.2 実践の内容

FW 実践は 2016 年度後期選択科目の「北海道の観光Ⅱ」において行われた。この授業は同年度前期開講の必修科目「北海道の観光Ⅰ」の発展版の授業であり、その目的は、北海道を訪れる海外観光客をいかに呼び込むか、またそれに対する観光業の現場のアプローチに潜む課題を明らかにするとともに、その解決策を検討するものであった。調査テーマを「観光における特徴的な場面で生じるコミュニケーション・ギャップを明らかにすること」に定め、外国語学部の学生として言語的な側面からアプローチできる解決策を検討することとした。本年度は、北海道釧路市にある阿寒湖畔をフィールドとして調査を実施した。その背景には、訪日外国人旅行者を地方へ誘客するモデルケースを形成する取組みである「観光立国ショーケース」として北海道釧路市が選定されたこと、また、阿寒湖周辺の雄大な自然を観光コンテンツとして海外に売り込むためのプロジェクト（「国立公園満喫プロジェクト」）の推進地として阿寒国立公園が選定されたことがある。さらには、自然や温泉のみならずアイヌ等の地域文化も含めた複数の観光コンテンツを有効に生かした取組みを行っている観光地をフィールドと

することで、学生に様々な学びが得られることを期待した点も阿寒を選択した大きな要因である。

この授業の全体像は、事前学習、現地でのFW、事後学習、調査結果報告の4部構成となっている。FW までには8回の授業機会が設けられており、この期間には、データの収集・分析も含めたインタビュー調査の方法、フィールドの入念な事前調査、具体的な調査課題の検討、インタビューにおける質問項目の考案と選定、インタビューの練習等を事前学習として行った。調査グループは、ホテルのフロント、土産物店、観光協会、エコミュージアムの4グループであり、授業内の活動はグループに分かれて実施された。FWは本論文の著者である教員3名の引率により1泊2日で行われ、1日目は滞在したホテルの海外事業担当者による阿寒のインバウンド観光に関する講演とアイヌ文化の体験が主な活動であった。2日目は、各グループに分かれ、それぞれの担当場所でインタビューを実施した。事後学習では、録音したインタビューデータの書き起こし、データ分析、英語プレゼンテーションによる調査結果報告、解決策の提案としての具体的な制作物の作成を行った<sup>1)</sup>。

## 2. 研究方法

### 2.1 データ収集と分析

本稿では、時任(2015)を参考に2種類の質問紙(質問紙[1][2])を作成し、FWの翌週に「北海道の観光Ⅱ」を受講する国際言語学科の1年生17名を対象に調査を実施した(有効回答者16名)。なお、質問紙の協力者全員から同意書をもとに研究協力への同意を得た。

質問紙[1]では、FWを取り入れた授業実践に対する学生の認識を5つの観点から把握した。質問項目は、授業活動やFWで生じた「他者とのコミュニケーション」、「調査課題に関する議論」、「授業で行っているプログラム」、「教師の支援」、「学生自身の成長」の5項目で構成されており、それぞれ5件法で回答を求めた(表1)。「他者とのコミュニケーション」の項目では、グループメンバー間及びインタビューとのコミュニケーションについて尋ねた(2問)。「調査課題に関する議論」の項目では、現場が抱える問題点についてディスカッションを十分に行い、課題を明確にすることができたかを尋ねた(5問)。「授業で行っているプログラム」は、ALの大きな目的である主体的な学びが実現できる活動があったか、また、プログラム内容が魅力的であったかを尋ねた(2問)。「教師の支援」では、教員とのコミュニケーションやサポート体制の有効性について尋ねた(2問)。「学生自身の成長」では、コミュニケーション能力、課題発見能力、プログラムの学びがい、進路検討への影響について尋ねた(4問)。

表1 質問紙[1](5件法)における質問項目

他者とのコミュニケーション	1. グループメンバーと十分にコミュニケーションを取った 2. インタビューに協力してくれた方と十分にコミュニケーションを取った
調査課題に関するディスカッション	3. グループのメンバーとコミュニケーション・ギャップなどの調査課題について議論した 4. インタビューに協力してくれた方々とコミュニケーション・ギャップなどの調査課題について議論した 5. 調査に行った場所や協力してくれた方々が感じている課題を明らかにすることができた 6. グループメンバーと調査から感じた課題の解決方法について議論した 7. 協力してくれた方々と課題の解決方法について議論した
授業で行なっているプログラム	8. 学生が主体的になれる活動(学生が中心となって学ぶ活動)が十分に準備されていた 9. 阿寒へ実際に行って調査を行う今回のプログラムの内容は、他の授業では体験できない魅力的なものだった
教師の支援	10. フィールドワークに向けて担当教員と十分にコミュニケーションを取った 11. 事前学習から当日も含めて、担当教員のサポートは参加学生にとって十分効果的だった
学生自身の成長	12. 自分のコミュニケーション能力を高めることができた 13. 自分の課題発見能力を高めることができた 14. 阿寒に実際にフィールドワークに行くプログラムは学びがいのあるものだった 15. 阿寒に実際にフィールドワークに行くプログラムは今後の進路について改めて考えるきっかけとなった

## 2.2 自由記述データの収集と分析

質問紙 [2] では、事前学習と FW を通じて得られた学びについて尋ね、自由記述式で回答を求めた。質問の具体的内容は次の 2 点である。

1. フィールドワークの事前学習を通して得られたものは何だと思えますか。得られたものとその理由を具体的に書いてください。
2. 当日のフィールドワークを通して自分が得られたものは何だと思えますか。得られたものとその理由を具体的に書いてください。

本稿では、SCAT (Steps for Coding and Theorization) (大谷 2008, 2011) と呼ばれる分析手法を援用して分析を行った。SCAT は質的データ分析のためのステップ・コーディングと理論化の手法であり、分析のプロセスは 5 つのステップを有する。分析のプロセスでは、インタビューや自由記述等のテキストから「〈1〉 テキスト中の注目すべき語句」を抜き出し、そこから「〈2〉 テキスト中の語句の言い換え」を行う。次に、「〈3〉 左を説明するようなテキスト外の概念」として、元のテキストデータのみではわからない背景や状況等の補足を行う。さらに、対象となっているデータ全体を説明するような「〈4〉 テーマ・構成概念」を創り出し、最後に新たな「〈5〉 疑問・課題」を記述する。また、〈1〉 から 〈4〉 までのステップを通じて、データに記述された内容を再文脈化する「ストーリーライン」及びそれをさらに抽象化させた「理論記述」を作成する。本稿では、SCAT を通じて作成したストーリーラインと理論記述に基づき、事前学習と FW を通じて得られた学びを解釈した。また、杉江・三ツ木 (2015) でなされた学習者の学びの価値に関する描写を参考にし、図式化により解釈を整理して記述した。自由記述回答は、質問 1 の有効回答数が 14、質問 2 の有効回答数が 15 であった。

## 3. 結果と考察

### 3.1 質問紙 [1] の分析結果と考察

#### 3.1.1 他者とのコミュニケーション

ここでは、グループメンバー及びインタビューーとのコミュニケーションという 2 つの観点から尋ねた質問の回答結果 (図 1, 図 2) について記述する。

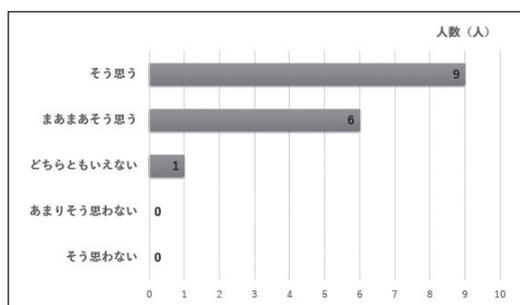


図 1 グループメンバーとのコミュニケーション

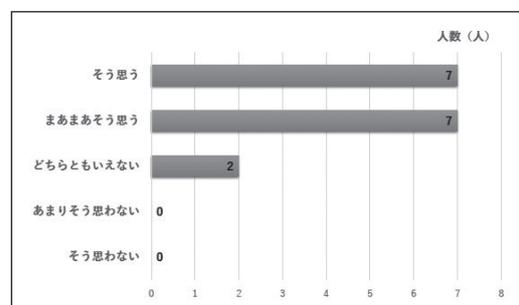


図 2 インタビューーとのコミュニケーション

グループメンバーとのコミュニケーションは、「そう思う」が 9 名 (56%)、「まあまあそう思う」が 6 名 (37%)、「どちらともいえない」が 1 名 (6%) で、肯定的評価は全体で 15 名 (94%) であった。さらに、インタビューーとのコミュニケーションでは、「そう思う」が 7 名 (43%)、「まあまあそう思う」

も7名(43%),「どちらともいえない」が2名(6%)で、肯定的評価は全体で14名(86%)であった。ALではグループワークが1つの方法論として示されているが、単にグループを作ってタスクに取り組むだけでは効果的なコミュニケーションが生まれる可能性は低い。よって、活動にはコミュニケーションが促進される仕組みが必要である。本実践では、フィールドで想定されるコミュニケーション・ギャップ等の問題点の抽出やそれに基づくインタビュー用の質問の考案というタスクを学生に課した。その際、ディスカッションをリードする学生を1名立てることでコミュニケーションが促されるよう工夫した。また、インタビューのリハーサルでは、用意した質問を尋ねるだけでなく、内容の広がり柔軟に対応して質問を重ねるトレーニングも行なった。これにより、本番でもコミュニケーションの促進が見られたことがうかがえる。このことから、本実践がグループワークを用いたAL成立の土台となるべきコミュニケーション機会を十分に提供する授業となっていたことがわかる。

### 3.1.2 調査課題に関する議論

ここでは、調査課題に関するディスカッションがグループメンバー間及びインタビューーとの間で十分に行われたかを尋ねた質問の回答結果について述べる。

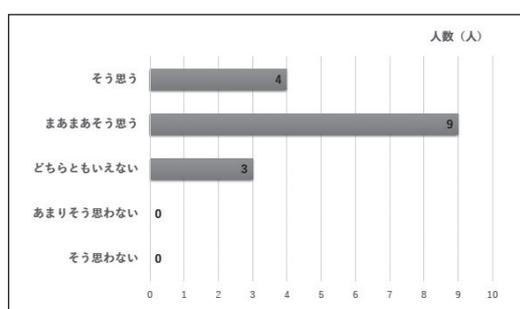


図3 調査課題に関するグループでの議論

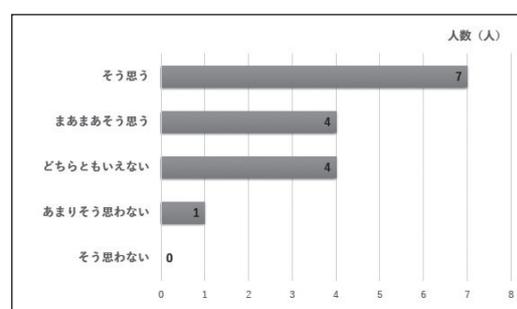


図4 調査課題に関するインタビューーとの議論

グループメンバーとの議論は、「そう思う」が4名(25%),「まあまあそう思う」が9名(56%),「どちらともいえない」が3名(18%)で、肯定的評価は全体で13名(81%)であった。また、インタビューーとの議論については、「そう思う」が7名(43%),「まあまあそう思う」が4名(25%),「どちらともいえない」が4名(25%),「あまりそう思わない」が1名(6%)であった。こちらは肯定的評価が全体で11名(78%)で、否定的評価は1名のみ見られた。両者ともに肯定的な評価が大部分を占めているが、「そう思う」はインタビューーの方がより良い評価を得ている。今回、グループで調査課題に関する議論が行われたのは主に事前学習の期間であったが、その段階の議論はインターネットからの情報に基づくものに留まっていた。しかし、観光業に携わる方と実際に議論する機会を設けたことでより深い内容の議論が可能となったため、十分なディスカッションが得られたと捉えている学生が多かった可能性がある。これらのことから、本実践が、ALの要素であるディスカッションの機会を十分に有していたことがうかがえる。一方で、中立的・否定的な評価も一定数見られた。これは、質問係や記録係等のインタビューー時の役割分担の設定が背景にあると考えられる。これがメンバー全員のディスカッション参加を妨げた可能性もあるため、今後は全員がバランス良くインタビューーに関わり、より活発な議論を行える仕組みを考える必要がある。

次に、フィールドに存在している課題が明確化できたかという問いの結果を図5に示す。「そう思う」が10名(62%),「まあまあそう思う」が4名(25%),「どちらともいえない」が2名(12%)であった。肯定的評価が多く、全体で14名(87%)となった。この理由には、今回の実践で「観光におけ

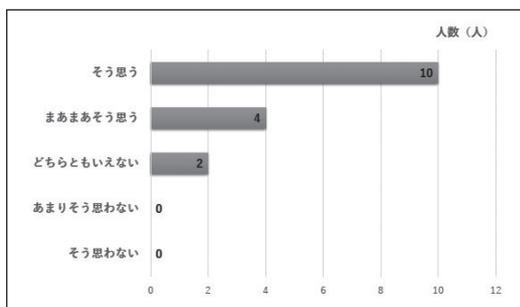


図5 フィールドが持つ課題の明確化

る特徴的な場面で生じるコミュニケーション・ギャップを明らかにすること」という明確な基準となる調査のテーマがすでに設定されていたことが挙げられる。学生はこのテーマを拠り所とすることで、より具体的な状況や場面における課題を探り、それを明確化することが可能となったと考えられる。また、調査結果を報告する機会や外国語学部の学生としてできる貢献を考察しそれを実行するという目標の設定も、課題の

明確化に繋げるための大きな動機として働いたと考えられる。したがって、FWを取り入れた実践では、「とりあえずフィールドに出向いて、とにかく何か調査してその結果を報告せよ」のような、学生が路頭に迷い込むデザインではなく、明確な基準となる調査テーマや到達目標を教員側が提示する授業のデザインが重要かつ必須である。グループメンバー及びインタビューーとの間で課題解決のためのディスカッションが十分に行われたかという質問については、以下のような回答が得られた(図6, 図7)。グループでの議論については、「そう思う」が3名(18%), 「まあまあそう思う」が9名(56%), 「どちらともいえない」が3名(18%), 「あまりそう思わない」が1名(6%)であり、肯定的評価は全体で12名(74%)であった。また、インタビューーとの議論については、「そう思う」が4名(25%), 「まあまあそう思う」が7名(43%), 「あまりそう思わない」が4名(25%), 「どちらともいえない」が1名(6%)で、肯定的評価は全体で11名(68%)であった。

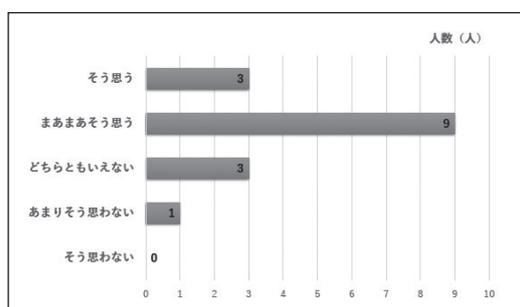


図6 課題の解決に向けてグループで議論

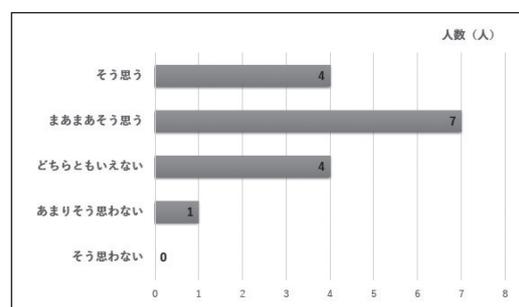


図7 課題の解決に向けてインタビューーと議論

両者ともに概ね肯定的な評価が得られた要因は、次のように解釈できる。1つは、事前学習の段階で、想定される課題と解決方法を議論する時間を十分に学生に提供したことが挙げられる。もう1つは、課題解決のために学生という立場でどのような貢献ができるかという問いを質問項目に含めたことにある。このように解決に向けた議論の機会を生む質問をインタビューーに対して行うことで、それをきっかけとした議論の深まりがあったと考えられる。ただし、中立の回答も一定数見られたため、課題解決のための議論に学生全員が主体的に参加し、十分な議論を行える仕組みをさらに整えていく必要がある。

### 3.1.3 授業で行なったプログラム

ここでは、主体的活動の充実及び授業全体のプログラムに対する評価を尋ねる質問の回答結果を示す(図8, 図9)。

主体的になれる活動の充実については、「そう思う」が10名(62%), 「まあまあそう思う」が5名(25%), 「あまりそう思わない」が1名(6%)であり、肯定的評価は全体で15名(87%)となっ

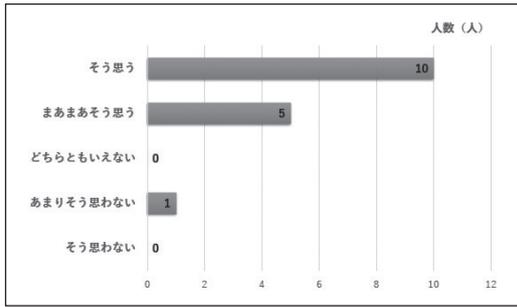


図8 学生自身が主体的になれる活動の充実

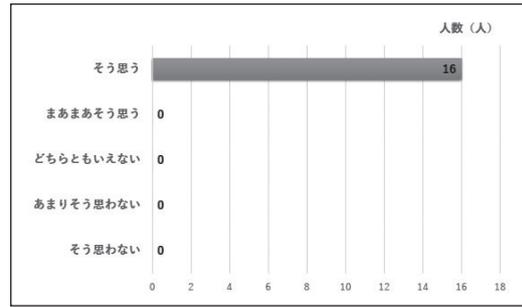


図9 プログラムの魅力

た。これは本実践における調査と課題解決のプロセスが、教師主導ではなく学生主導で行われる点を重視したことによるものと考えられる。また、実際の現場に向いて主体的に動かなければ調査結果や課題の明確化、解決策等が得られない学習プロセスを含む授業のデザインも学生の主体性を生じさせる要因になった可能性もある。プログラムの魅力に関しては16名（100%）が「そう思う」と回答し、受講者全員が最も肯定的な評価をしていた。これは、高校時代までの研修旅行とは大きく異なったりアルな実地調査のプロセスを体感するFWという学習形態が、これまでにない新しい学びの機会として学生に肯定的に受け止められたことを物語っている。したがって、本実践は主体的な学びを促すALの1つとして効果的に働いたと考えることができる。

### 3.1.4 教師の支援

図10と図11は、事前学習からFW当日までの教員とのコミュニケーション及び教員によるサポートの効果について尋ねる質問の回答結果である。

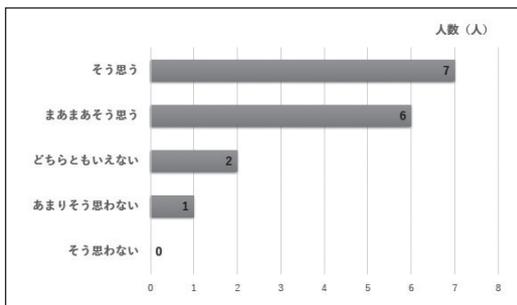


図10 教員とのコミュニケーション

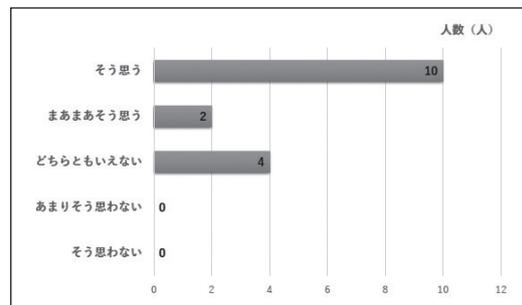


図11 教員のサポート

教員とのコミュニケーションについては、「そう思う」が7名（43%）、「まあまあそう思う」が6名（37%）、「どちらともいえない」が2名（12%）、「あまりそう思わない」が1名（6%）であり、肯定的評価は全体で13名（80%）であった。教員のサポートについては、「そう思う」が10名（62%）、「まあまあそう思う」が2名（12%）、「どちらともいえない」が4名（25%）であり、肯定的評価は全体で13名（74%）であった。本実践では、教員が学習プロセスに積極的に関わる部分とそうではない部分を明確に分けて指導を行なった。例えば、データの収集・分析やインタビューのリハーサルではワークショップ式の指導を行ったが、説明による指導や積極的なコミュニケーション（声かけ）によって学生の理解を促すよう心がけた。また、学生が具体的な調査課題や質問内容について議論を行っている際、教員は学生を観察しつつ彼らの自主性に委ねて議論を展開させ、求められた時や必要性を感じた時にのみ助言を交えてコミュニケーションを図るよう努めた。したがって、このようなメリハリのあるコミュニケーションを交えた指導においても、学生は教員とのコミュニケーションの充実を認

識し、教員によるサポートとしてその有効性を認識していることがわかった。

### 3.1.5 学生自身の成長

ここでは、コミュニケーション能力と課題発見能力の向上について尋ねる質問の回答結果を示す(図12, 図13)。コミュニケーション能力の向上については、「そう思う」が5名(31%),「まあまあそう思う」が6名(37%)であった。このように肯定的評価が全体で11名(62%)いた一方で、「どちらともいえない」も5名(31%)おり、一定数の中立的評価が確認された。本実践はグループワークやインタビューを通じて多くのコミュニケーション機会を提供する授業のデザインを採用したものの、コミュニケーション能力の向上を感じる学生は全体の60%にとどまった。これは、初対面のインタビューに対して積極的に話しかけて質問をするという活動が、学生には多少ハードルの高いものであり、コミュニケーション能力向上の実感にまで繋がられなかった可能性がある。加えて、インタビュー時のアンバランスな発言回数の影響も1つの要因として考えられる。課題発見能力の向上については、「そう思う」が2名(12%),「まあまあそう思う」が10名(62%),「どちらともいえない」が3名(18%),「あまりそう思わない」が1名(6%)であり、肯定的評価は全体で12名(74%)であった。

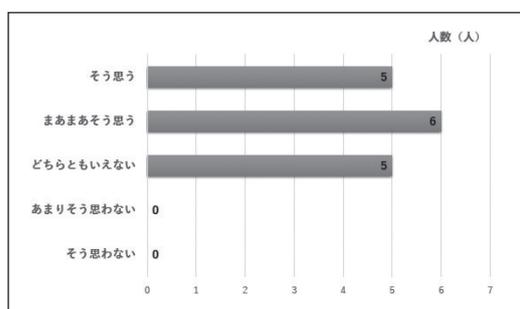


図12 コミュニケーション能力の向上

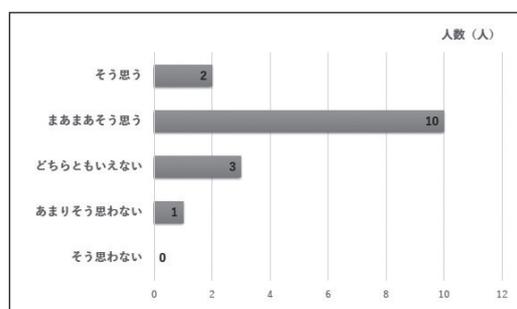


図13 課題発見能力の向上

こちら概ね肯定的な評価が大部分を占めているが、その要因として、実際の現場に向いて質問の回答や課題の明確化と解決策を得るという主体的な学習プロセスが、学生の課題発見能力の向上を促したことが挙げられる。総じてははっきりとした肯定的な評価が得られていない点もあり、それについては、成功体験をできるだけ多く積み上げることでできるタスクを授業に組み込む等の新たな対応が求められる。

次に、プログラムにおける学びがいの実感及び今後の進路検討への影響に関する質問の回答結果を図14及び図15に示す。

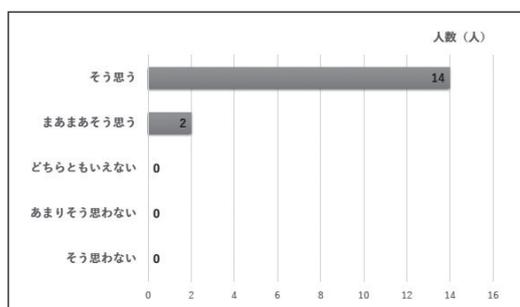


図14 学びがいの実感

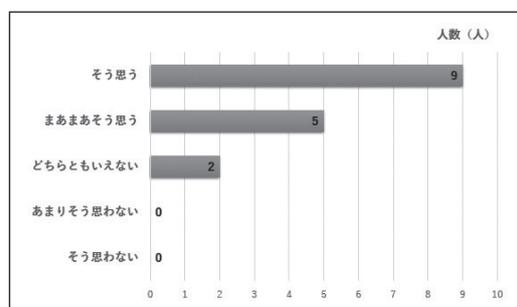


図15 今後の進路検討への影響

学びがいの実感に関しては、「そう思う」が14名(87%),「まあまあそう思う」が2名(12%)であり、全て肯定的な評価であった。このことから、グループワークやFW等のALを導入した本実践は、

大学初年次の学生にとって非常に新規性の高い学びの形態であったと考えられる。それにも関わらず、受講した学生のほぼ全てが学びがいを感じたことは特筆すべきであり、ALのさらなる導入の必要性を示唆するものである。なお、具体的に学生が実感した学びについては、次節3.2で詳述する。今後の進路検討への影響については、「そう思う」が9名(56%)、「まあまあそう思う」が4名(25%)、「どちらともいえない」が2名(12%)であり、肯定的評価は全体で13名(81%)であった。卒業後の進路に具体的な形で意識を向けている大学初年次の学生は少数であることが予想される中で、学生が観光業の現場で働く自身のイメージを持ち始めたことがこの結果からうかがえる。さらに、観光業を将来の選択肢の1つに加える貴重なきっかけを本実践が提供できた可能性も示唆できる。

## 3.2 質問紙 [2] の分析結果と考察

### 3.2.1 事前学習を通じて得られた学び

学生それぞれが事前学習を通じて得た学びの認識についての分析結果をSCATの「ストーリーライン」に基づいて以下に示す。また、学生一人ひとりの学びの認識を捉えやすくするために、SCATの「理論記述」に基づいて概念を整理し、図16に示した。なお、SCATを援用して分析した表は付録1の通りである。

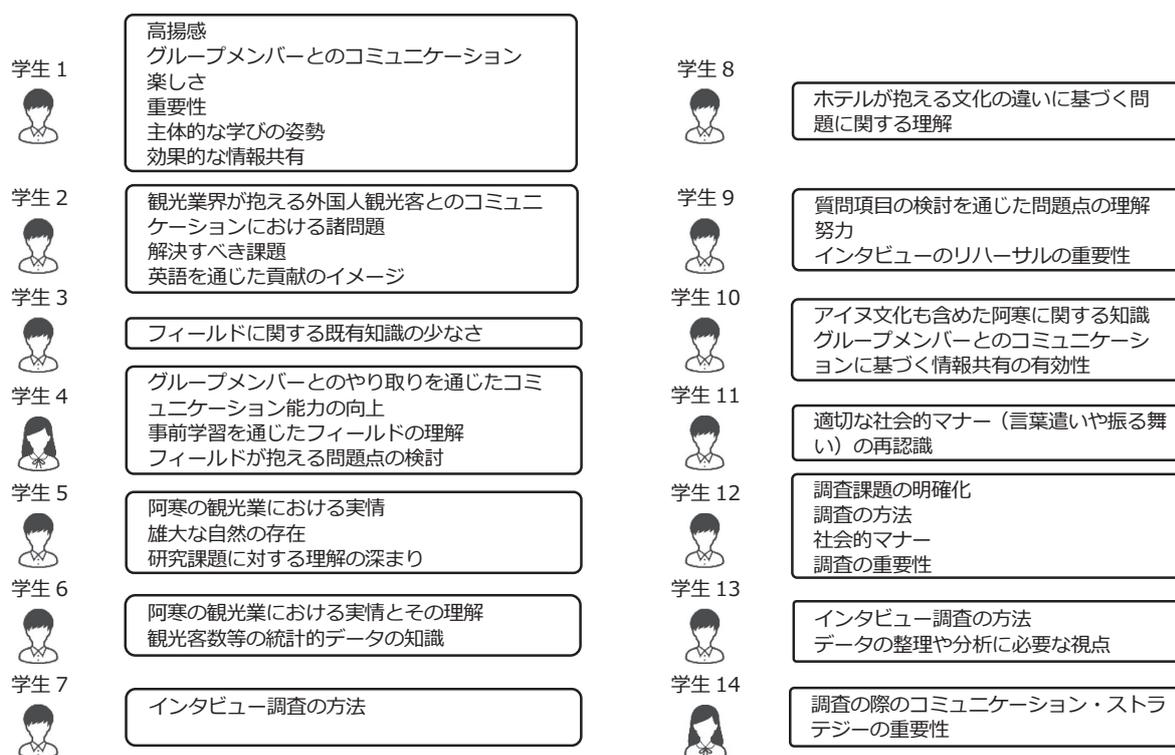


図 16 事前学習から得られた学びの認識

学生1は、事前学習の段階からFWに向けて高揚感を感じており、学びに対する主体的な姿勢が得られたと認識している。また、特にグループメンバーとのコミュニケーションの楽しさや重要性の実感、コミュニケーションに基づく効果的な情報共有も得られたと認識している。学生2は、観光業界が抱える外国人観光客とのコミュニケーションにおける諸問題などの解決すべき課題に関する知識を得た。また、それらの課題に対する大学生としての自分ができる英語を通じた貢献のイメージも得た。学生3は、事前学習を通じてフィールドに関する既有知識の少なさを認識した。学生4は、事

前学習でフィールドの理解やフィールドが抱える問題点の検討機会が得られたと認識している。また、この際にグループメンバーとのやり取りを通じたコミュニケーション能力の向上を実感している。学生5は、事前学習を通じて阿寒の観光業の実情や雄大な自然の存在に対する理解、また事前学習から得た知識による調査課題に対する理解の深まりを得たと認識している。学生6は、事前学習により阿寒の観光業における実情とその理解や観光客数等の統計的データの知識を得た。学生7は、事前学習でインタビュー調査の方法を学んだと認識しており、インタビューのリハーサル的重要性も感じている。学生8は、事前学習を通じて、ホテルが抱える文化の違いに基づく問題に関する理解を得た。学生9は、事前学習により質問項目の検討を通じたレセプションが抱える問題点の理解とそのため努力をする機会を得るとともに、インタビューのリハーサル的重要性も認識した。学生10は、事前学習を通じてアイヌ文化も含めた阿寒に関する知識を得た。また、グループメンバーとのコミュニケーションに基づく情報共有の有効性を認識している。学生11は、事前学習で行われた指導を通じて、適切な社会的マナー（言葉遣いや振る舞い）の再認識をする機会を得た。学生12は、事前学習の段階で調査課題の明確化が実現した。また指導を通じてインタビュー調査の方法論、社会的マナー、そして調査の重要性に対する学びが得られたと認識している。学生13は、事前学習を通じてインタビュー調査の方法やデータの整理や分析に必要な視点に対する学びを得られたと認識している。学生14は、事前学習を通じて調査の際のコミュニケーション・ストラテジーの重要性を認識する機会が得られた。

### 3.2.2 フィールドワークを通じて得られた学び

FWから学生それぞれが得た学びの認識についての分析結果をSCATの「ストーリーライン」に基づいて以下に示す。また、学生一人ひとりの学びの認識を捉えやすくするために、SCATの「理論記述」に基づいて概念を整理し、図17に示す。なお、SCATを援用して分析した表は付録2の通りである。

学生1はFWを通じて、フィールドが持つ観光地としての魅力やアイヌ民族が持つ伝統的価値を認識し、幸福な感情を得た。また、コミュニケーションに対する積極性及びコミュニケーション能力の向上を認識している。学生2はFWを通じて、観光地が持つリアルな現状、想定外のコミュニケーション・ギャップの存在、外国人観光客のニーズ、現場で必要な外国語スキルを知識化した。また、学びが得られた実感も認識している。学生3はFWを通じて、フィールドに関する情報の知識化やフィールドが持つ具体的課題に対する理解を得られたと認識している。学生4はFWを通じて、注意深く物事を見る力に加え、自然の生態系及び現状を新しい知識として得られたと認識している。また、FW経験に対する肯定的評価をしている。学生5は事前準備・学習に加えて、FWでの体験活動を通じて、自然の雄大さや魅力のリアルな体感が得られたと認識している。学生6はFWを通じて、観光業に従事する方々のリアルな実感を聞く機会が得られたと認識している。学生7はFWを通じて、実際のインタビュー調査に基づいた現状や課題に対する理解が得られたと認識している。学生8はFWを通じて、ホテルのフロント担当者が大切にしている仕事上の信念や国の違いで差別しないサービス提供の重要性に対する理解が得られたと認識している。学生9はFWを通じて、現地に行ったからこそ得られる確かな情報の獲得やインタビュー方法の知識、また貴重なインタビュー経験が得られたと認識している。学生10はFWを通じて、海外に向けた広報活動の重要性を認識している。学生11はFWを通じて、コミュニケーション・ギャップ対処法や自分自身が観光業会で働くイメージ

学生 1 	フィールドが持つ観光地としての魅力 アイヌ民族が持つ伝統的価値の認識 幸福な感情 コミュニケーションに対する積極性の向上 コミュニケーション能力の向上	学生 9 	フィールドワークならではの学び 現地に行ったからこそ得られる確かな情報 の獲得 貴重なインタビュー経験 インタビューの方法論
学生 2 	観光地が持つリアルな現状 想定外のコミュニケーション・ギャップ 現場に必要な外国語スキル 外国人観光客のニーズ 学びが得られた実感	学生 10 	海外に向けた広報活動の重要性を認識
学生 3 	フィールドに関する情報の知識化 フィールドが持つ具体的課題の理解	学生 11 	コミュニケーション・ギャップ対処法 自分自身が観光業会で働くイメージ
学生 4 	注意深く物事を見る力 自然の生態系及び現状 新しい知識 フィールドワーク経験に対する肯定的評価	学生 12 	体験を通じた学びの有効性 知識・経験の応用イメージ 発表内容の明確化
学生 5 	自然の雄大さや魅力のリアルな体感	学生 13 	北海道の自然に対する考察に必要な経験 インタビューに基づく新しい知識の獲得 インタビューを通じた課題検討の機会 知識・経験の応用イメージ
学生 6 	観光業に従事する方々のリアルな実感	学生 14 	外国人観光客の現状 人気観光スポットが抱える課題
学生 7 	実際のインタビュー調査に基づいた現状や 課題の理解	学生 15 	英語が国際共通語として観光の現場で使 用されている現実の理解
学生 8 	ホテルのフロント担当者が大切にしている仕事上 の信念 国の違いで区別しないサービス提供の重要性	学生 16 	インタビューに対する能動的な取り組み の姿勢 自分自身の変化の認識

図 17 フィールドワークから得られた学びの認識

を得られたと認識している。学生 12 は FW を通じて、体験を通じた学びの有効性や知識・経験の応用イメージが得られたと認識している。加えて、今後の調査結果報告で述べる内容の明確化も認識している。学生 13 は FW を通じて、北海道の自然に対する考察に必要な経験を得られたと認識している。加えて、インタビューに基づく新しい知識の獲得やインタビューを通じた課題検討の機会、知識・経験の応用イメージが得られたと認識している。学生 14 は FW を通じて、外国人観光客の現状や人気観光スポットが抱える課題に対する理解が得られたと認識している。学生 15 は FW を通じて、英語が国際共通語として観光の現場で使用されている現実を理解できたと認識している。学生 16 は FW を通じて、インタビューに対する能動的な取り組みの姿勢、また取り組みに対する自分自身の心情変化を得られたと認識している。

#### 4. まとめと今後の課題

本稿では、AL の手法の 1 つである FW を取り入れた授業実践について、「学生がどのような認識を持っているのか、また「どのような学びが得られたと認識しているのか」について 2 種類の質問紙の回答結果に基づき分析を行った。1 つ目の質問紙では、FW を含む授業実践に対する学生の認識を「他者とのコミュニケーション」「調査課題に関する議論」「授業で行なっているプログラム」「教師の支援」「学生の成長」の 5 つの観点から把握し、授業デザインに対するフィードバックを得た。その結果、本実践がコミュニケーションを促進する授業となっていたこと、ディス

カッションの機会を十分に有する授業であったこと、主体的学びを提供できる魅力あるプログラムであったこと、教員とのコミュニケーション及び教員のサポートが十分に備わっていたこと、コミュニケーション能力の向上・課題発見能力の向上・学びがいを実感できる実践であったこと、自らの進路を改めて考えるきっかけとなる実践であったことがわかった。

2つめの質問紙では、事前学習とFW それぞれから得た学びを学生がどのように認識しているかを問い、得られた自由記述の回答を質的に分析した。その結果、事前学習については、調査のフィールドであった阿寒の観光業の現状や問題点の想定と理解、インタビュー調査の知識や重要性、社会的マナー、コミュニケーションの重要性や能力の向上、効果的な情報共有の方法等が得られる学びの機会であったと認識していることがわかった。また、FW については、調査のフィールドであった阿寒が持つ観光地としての魅力と現状、自然の雄大さや魅力、自然の生態系の現状に対する理解、知識・経験の応用イメージの獲得、観察力の向上、海外に向けた広報活動の重要性、外国人観光客のニーズ、観光業界で求められる外国語スキル、学びに対する姿勢の肯定的な変化、貴重なインタビュー体験、コミュニケーションに対する積極性、コミュニケーション能力の向上等、多種多様な気づきや学びが得られる機会であったと認識していることがわかった。

今後は、次年度に履修する学生がさらなる学びを得られるよう、授業デザインの改善・改良を行うことが必要である。例えば、コミュニケーションやディスカッションの機会をバランスよく提供する仕組みや、トレーニングの蓄積によってインタビューに対する心理的ハードルを下げる取り組み、さらにはインタビュー時における発言回数のアンバランスさを解消する工夫の必要性等が挙げられる。また、学生が成長や自信の向上をより多く感じ取ることができるよう、多くの成功体験を積むことのできる授業のデザインも求められる。

本実践では、総じてFW を取り入れたAL に肯定的なフィードバックをした学生が多かった。これは、必修科目であった前期の入門科目（「北海道の観光Ⅰ」）とは異なり、本実践を行った授業が選択科目であったことが1つの要因である可能性が高い。つまり、北海道の観光をターゲットとする学びに対して動機付けが高い学生がこの授業を履修していたために、多種多様な学びが得られる効果的なAL の実践が実現できたと考えられる。したがって、学習動機の向上を図る授業デザインを心がけながら、今後さらにAL の実践を推し進めていくことが求められる。

## 注

- 1) フィールドワークの様子や写真は、下記 URL を参照。

<http://www.do-bunkyo.ac.jp/department/univ/foreign/international/topics/>

## 文献

大谷尚，2008，「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案：着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第 54 卷（2）：27-44.

大谷尚，2011，「SCAT: Steps for Coding and Theorization: 明示的手続きで着手しやすく小規模データにも適用可能な分析手法」『感性工学』第 10 卷（3）：155-160.

佐野愛子，2016，「国際言語学科の新カリキュラムの理論的背景および実験的導入の検証」『北海道

文教大学論集』第17号:17-25.

杉江聡子, 三ツ木真実, 2015, 「遠隔交流が創出する学びの経験とその価値: 中国語学習における異文化体験の質的分析」『e-Learning 教育研究』第10巻:1-13.

時任隼平, 2015, 「高等教育におけるフィールドワーク実習のデザインに関する研究: 山形大学基盤教育「フィールドワーク共生の森もがみ」を事例として」『山形大学高等教育研究年報』第9号:27-32.

中村至, 2016, 「単元学習とアクティブ・ラーニング」『北海道文教大学論集』第17号:89-99.

溝上慎一, 2007, 「アクティブ・ラーニング導入の実践的課題」『名古屋高等教育研究』第7号:269-287.

溝上慎一, 2014, 『アクティブラーニングと授業学習パラダイムの転換』東信堂.

文部科学省, 2012, 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて: 生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学へ』中央教育審議会答申.

付録1 SCAT (Steps for Coding and Theorization) を使用した事前学習から得た学びの認識に関するデータ分析表

発語者	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外概念	〈4〉テーマ・構成概念	〈5〉疑問・課題
学生1	現地に行く前の高ぶる感情、友達とのコミュニケーションを楽しむ、大切さ、積極性、現地に行った際に質問するであって質問を作る時に現地のことをHPだけでなく有力になる物事を使い、同じグループの人たちと情報を共有することで現地にいった際に役に立つであろう会話ができたため。	高ぶる感情、友達、コミュニケーション、楽しさ、大切さ、積極性、質問を作る、情報を共有、現地、役に立つ、会話、できた	高揚感、友人、意思の疎通、喜び、重要性、主体性、質問作成、知識の伝達と交換、フィールド、有効、話し合い、やれた	グループワークによる事前学習・準備の活動形態	高揚感、グループメンバーとのコミュニケーション、楽しさ、重要性、主体的な学びの姿勢、効果的な情報共有	積極性はフィールドワークという学習形態から生じたものか
学生2	外国人旅行者とのコミュニケーションギャップなど、観光業界はたくさん問題を抱えていること知り、自分たちが学生ができることがあると感じました。自分たちの英語能力を活かせる場があるんだなと思いました。	外国人旅行者、コミュニケーション、ギャップ、観光業界、問題、知る、学生、できることがある、英語能力、活かせる場がある	外国人観光客、コミュニケーションでの食い違い、観光の仕事、解決すべき課題、わかる、大学生、貢献できる場がある、英語の語学力、	外国人観光客との言語を主としたコミュニケーション・ギャップ	観光業界が抱える外国人観光客とのコミュニケーションにおける諸問題、解決すべき課題、英語を通じた貢献のイメージ	具体的にどのような場面で貢献できると感じましたか
学生3	最初は剣路をそんなに知らない、自然が豊富やアジア人が多い、ラムサール条約に入るとわかかわからなかった。	最初、剣路、そんなに知らない、自然が豊富、アジア人が多い、ラムサール条約、入っている	初め、道東の都市、あまり知識がない、豊かな自然、たくさんアジア人の来訪、湿地の保存に関する国際条約、加入している	最初=事前学習の段階=フィールドワーク実施前	フィールドに関する既存知識の少なさ	新たな知識は蓄積されたか
学生4	コミュニケーション能力、グループメンバーとコミュニケーションをとろうと頑張ったから、課題発見力、目的の場所では何が必要なのか事前学習の段階で真剣に考えることができた。	コミュニケーション能力、グループメンバー、コミュニケーションをとろうと頑張った、課題発見力、目的の場所、何が必要なのか、事前学習、考える、できた	意思疎通の力、同じグループの仲間、意思疎通を図る、努力した、問題発見する力、調査のフィールド(阿寒)、課題、事前学習、検討する、実施した	グループワークによる事前学習・準備の活動形態、インターネットを通じたフィールドの事前調査	グループメンバーとのやり取りを通じたコミュニケーション能力の向上、事前学習を通じたフィールドの理解、フィールドが抱える問題点の検討	事前に考えたことと現場ではギャップが存在したか
学生5	阿寒の観光事業の現状、そして阿寒の自然についてある程度の情報を事前調査を通して得られた。ある程度の知識を蓄えて阿寒研修に臨んだことで、より自分たちの掲げるテーマに対する理解とブラスアリアアの知識を得ることができた。	観光事業、現状、自然、情報、事前調査、知識を蓄える、研修、臨む、テーマ、理解、ブラスアリアア、知識、得る	観光業、実情、野生的な環境、知識、事前学習活動、知識の蓄積、フィールドワーク実習、取り組む、調査課題、認識、付加的知識	グループワークによる事前学習・準備の活動形態	阿寒の観光業における実情、雄大な自然の存在、調査課題に対する理解の深まり	ある程度の知識、情報とは具体的にどのような内容か
学生6	一般的に言われている、現在の問題点やデータなどをえられた	一般的、現在、問題点、データ	よく知られている、現状、抱えている課題、数字情報	インターネットを通じたフィールドの事前調査、観光客数等の統計データ	阿寒の観光業における実情とそれらをフィールドワークに生かされたか	
学生7	インタビュの仕方事前にはリハーサルをやっておいたから当日そこまで慌てふためくことにはなかった。	インタビュ、質問、外国人観光客、リハーサル、やっておいた、慌てふためく、ない	質問による聞き取り、方法、事前学習・準備、練習した、落ち着いてやれた	言葉遣いやインタビュの流れについてリハーサルを複数回実施	インタビュー調査の方法、インタビューのリハーサルの重要性	具体的にリハーサルのどの内容が効果的だったか
学生8	ホテルで問題となっている外国人観光客の行動などを調べ、物を勝手に持ち帰ったり文化の違いなどがあることなど、ネットで調べて知識を得た。	ホテル、問題、外国人観光客、行動、物、持ち帰る、文化の違い、ある、ネット、知識、得る	宿泊施設、解決すべき課題、海外からの旅行者、行い、物品、自分のものにする、異文化の存在、インターネット、理解する	インターネットを通じたフィールドの事前調査	ホテルが抱える文化の違いに基づく問題に関する理解	文化の違いに関することとをフィールドワークで議論したか
学生9	レセプションで考えられる質問を考えたこととどのようなことに困るかを理解できる努力ができた。インタビュの準備をしたことによって円滑に進めることができた。	レセプション、質問、考える、どのようなことに困る、理解、努力、インタビュ、準備、円滑に進める、できる	ホテルのフロント、インタビュ内容、検討、抱えている問題の理解、頑張張り、事前学習(リハーサル)、スムーズに実施	フロントの担当者へインタビュをするグループ、言葉遣いやインタビュの流れについてリハーサルを複数回実施	質問項目の検討を通じた問題点の理解、努力、インタビューのリハーサルの重要性	具体的にリハーサルのどの内容が効果的だったか







# Active Learning through Fieldwork and Students' Perceptions of Learning Outcomes

MITSUGI Makoto, SANO Aiko and SAWADA Takashi

**Abstract:** The Department of International Language Studies at Hokkaido Bunkyo University introduced active learning-centered classes at the onset of the new curriculum from the 2016 academic year. The purpose of this paper is to consider students' recognition of active learning through fieldwork and to get feedback about the practice of fieldwork from five perspectives: communication with others, discussion for research questions, program implemented in class, support from teachers, and student improvement. Moreover, this paper describes what students were able to learn from their experiences of pre-learning and fieldwork by means of SCAT analysis (Otani, 2008, 2011). Despite the limitation of this study, looking into only one course conducted under the new curriculum, the present study reports the strength in active learning classes. It concludes in a discussion of further improvement in teaching practices through such an approach.

**Keywords:** active learning, fieldwork, students' perceptions, learning outcomes